第２回日本実践美術教育学会賞（辻田賞）受賞
特別寄稿

学び続ける場を求めて
―研究会の在り方とその学び―

滋賀県高島市立安曇川中学校
堤　祥晃
大阪府摂津市立第三中学校
宣　昌大

この度は、栄誉ある賞をいただき、ありがとうございます。日本実践美術教育学会から評価を受ける日が来るとは考えてもみませんでした。なぜ、私たち二人が受賞させていただけたのかはよく分かりません。しかし、二人「揃って」の受賞ということであれば少し思い当たることがあります。本来でしたら、受賞にあたり、二人それぞれでこれまでの美術教育について感じたことを書かせていただくところですが、二人「揃って」の受賞の意図を尊重し、二人「揃って」学会員の皆様にお礼と、これまでの研究会で学んだことをまとめて述べたいと思います。

1　さまざまな研究会

1-1　出会いも美術教育の研究会

私たち二人の出会いは 2010 年の国立近代美術館・国立新美術館で行われた、『美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修』に遡ります。私たちは互いに、教員として働き始めてから、10 年前後のキャリアの美術教師となっていました。授業や学級経営にも慣れ、若さゆえの有能感と、このままでよいのかという不安感が混ざりあった感じで、毎日の教員生活を滋賀県と大阪府にてそれぞれ送っておりました。たまたま、上記の研究会に参加し、東京の美術館の会場で知り合うことになりました。そこで近県ということもあり意気投合し、グループは違いましたが今の美術教育について互いに学びを深め合いました。特に、私たちは美術の授業は「何を教える教科なのか」について、何度も語り合いました。美術教育の話をしている時には、レジャーやゲームをしている時の楽しいとは違った、不思議な『楽しい』という感覚を持ちました。そこでは、美術教育の話に留まらず、学校教育に関する様々な考え方や今までの実践、趣味の話や人生観、好きな作家など、とめどなく話が広がり、夜のお酒も手伝ってか、「美術教育は自分たちにとって、人生そのものかもしれない」と感じ合えることができました。

1-2　生徒に寄り添った授業

互いに学校に戻ってからは、東京の夜に話し合ったことを、自分たちなりの方法で実践しました。鑑賞では、自分自身に作品を見る力が十分備わってないことを実感し、生徒の力を借りながら鑑賞の授業を模索しました。生徒と一緒に作品を見ながら、楽しく対話ができる授業をしよう、と考え方が変わったのも、美術教育の研究会の場での貴重な出会いがあったからです。

1-3　やっぱり研究会より懇親会

東京での研究会（での懇親会）が忘れられず、半年ほどして互いに連絡を取り合い、多い時は毎週のように二人で研究会に参加して、美術教育の授業について話をする機

会をつくりました。自然と互いに誘い合い、参加するごとに学会や研究会（での懇親会）でさらに学んでみたいという思いが強くなりました。

『美術による学び研究会 滋賀大会』、『日本美術教育学会 京都大会』、『中学校美術Q＆A in 大阪』など、全国の実践者や研究者が集まる会場で、日本の美術教育の牽引者だと思えるような先生方と出会い、話を聞き、一緒に語ることができました（写真１）。そして、次第に研究会より懇親会での会話にこそ価値があるという考えが強くなりました。ここで、一つの理想形ともいえる研究会『美術教育ぐんま塾』と出会うことになります。

写真１　「研究会はレジャーである」by 堤

1-5　どうして研究会より懇親会『美術教育ぐんま塾』から

『美術教育ぐんま塾』は、群馬大学名誉教授の新井哲夫先生が立ち上げられた研究会です。私たち二人が参加した時には、群馬の温泉旅館で行われる、一泊二日のアットホームな雰囲気の会でした。参加者は全員実践を発表する形式で、少人数で活発な意見交換をすることができ、自分たちの実践をじっくりと見つめなおすことができました（写真２）。

写真２　「美術教育ぐんま塾」に参加して

また、群馬までの片道６時間半の車中では、二人の心の距離が近づき、会話がなくても意思疎通ができるような感覚になりました。

この群馬での学びは、誰かの発表にじっと耳を傾ける研究会というより、懇親会で語りあい、自分の生きてきた経験と美術教育が結びつくところに大きな収穫がありました。

2　我々が目指した学びの場（実践交流会）

2-1　我々が目指したもの

私たち二人は、研究会で出会ったことで、美術教育の実践研究で目指すものが明確になったと思います。具体的には以下の四つです。

①お互いの実践について、忌憚なく意見交換できる場を作りたい。
②様々な視点、角度から題材を見つめ直したい。
③表面的に素材や技法を真似するのではなく、 授業のねらいや生徒の学びを共有したい。
④お互いに刺激を与え合い、切磋琢磨する中で授業をレベルアップさせたい。

この四つは、教師も生徒も人間として成長するために「必要な場」にするための条件のような項目だと考えています。それは、

自分の中から生み出すものであり、生み出すためには自分からどんなことでも語り出せる雰囲気と、熱気と、経験に基づいた対話が必要です。コンセプトはまさに「懇親会」です。

2-2　ひとクラス分の実践を持ち寄る実践交流会

私たちは「懇親会」のような研究会で自分たちの学びの場を作ろうと考えました。それが、私たちが立ち上げた「実践交流会」です。この名前も便宜的につけている名称で、符丁のようなものです。「実践交流会」では目指す目標を三つに絞りました。

実践交流会の目標

①飾らない発表
　授業や生徒の実態に即した話し合い。
②参加者の力量を高め合う
　広く実践を紹介することが目的ではなく、今後の授業改善の参考にすることが目的です。
③即授業につながる
　今の悩みも”みんなでみるとみえてくる”。

そして、この目標のために気を付けておきたい四つのポイントを掲げました。

実践交流会の大切にしたい四つのポイント

①少人数
　充分な発言と気軽な意見交流のために参加者は10名程度。
②参加者＝発表者
　参加者は発表者です。他人の発表にツッコむ自分の発表にツッコまれる、お互いがお互いを刺激し合う関係。即授業につながる今の悩みも”みんなでみるとみえてくる”。
③1クラス分の作品
　全員の作品から授業の全体像が見える。また課題のある生徒の作品にこそ、教師の授業改善の糸口が見える。
④指導助言者はいない
　全員が発表者、学びを共有する集まりなので年齢や経験を問わずフラットな研究会。

参加する先生方には、これらのポイントを説明し、十分理解していただいたうえで、実践交流会を開催しました。

第1回は、2012年12月27日摂津市コミュニティプラザの会議室を借りて、小学校、中学校の9名の教員で開催しました（写真3）。

写真3　第1回の実践交流会の様子

参加者（発表者）には以下の約束で発表をしていただきました。

○交流時間は一人40分間
○授業の説明またはプレゼンを7分以内
○授業のねらいを明確に
○難しい説明より、作品を見て話し合う
○子どもの活動の様子を紹介する
○必要な情報はコンパクトに伝える
○授業者の思いなども盛り込む

これらの約束は、第1回から今でも変えていません。8年たった今でも変わっていないのは、やはり交流をする上で先生方のニーズに合った方法なのだと感じています。

特に、作品を見るときには以下の三つを大切にして共有しています。

①教師の思いと生徒の思い
授業のねらい（付けたい力）と子どもたちのやりたい活動が合致しているか。
②”楽しい”と”学び”のバランス
楽しく取り組める活動と、学びの要素（授業のねらい）が両立しているか。
③課題がある子へ注目
どこでつまずいているのか。それが、その子の問題なのか、授業の手立てがまずいのか。

この視点は、実践交流会のための視点であり、授業づくりの視点でもあります。美術や図画工作の授業をしていると、私たちはついつい子どもの活動を「作品をつくるための」課程としてとらえがちです。もちろん、子どもたちはその様な意識で活動しています。しかし、私たち教師は、「活動そのもの」に着目すべきなのだと感じます。実践交流会の参加者は、このような視点を大切にしたいと考えてくださる方ばかりだと思います。だからこそ、参加していただいた皆さんから、私たち二人も多くのことを学べたのです。

2-3 「旅する」実践交流会

実践交流会を続けているうちに、関西を中心に小学校、中学校、高等学校、支援学校と多くの参加希望者が増えてきました。10 名程度という人数制限がありましたから、日程を 2 日間に増やすことや、一度に 2 グループ同時に行って途中で参加者を交代するといった方法を考えないといけませんでした。

実践交流会は、会場の立地や会場使用料の関係から、大阪の摂津市での開催が多かったのですが、私たち二人の日頃からの合言葉である「研究会はレジャーである」の理念も遂行すべく、各地への遠征を始めました。

2016 年 8 月には第 8 回として岡山、2017 年 1 月には第 9 回として新潟（写真 4）、第 11 回として大阪・堺（写真 5）、そして 2019 年には第 14 回として姫路(写真 6）での開催をしています。

写真 4　第 9 回新潟での実践交流会の様子

写真 5　第 11 回堺での実践交流会の様子

写真 6　第 14 回姫路での実践交流会の様子

2-4　実践交流会を続けてきての課題

前述しましたが、実践交流会を続けておりますと、多くの地域、校種の皆さんとの新たな出会いがあり、おかげで美術教師としての生き方自体を学べたように思います。これらの生き方の学びができる構造は、本来私たち二人が授業で生徒たちと共有しなければならないことだったと思います。若いころ、「何をどうする」といった指導テクニックを模索し、そのテクニックで生徒と接していたことに大きな意味はないと教えられたように思います。

特に私たちは小学校の実践から「子ども

目線」とは何かを、何度も考えさせられました。子どもたちと共に学びや授業を作ることの、視点や姿勢を学べたことの意味は非常に大きかったです。

一方で、継続することによって実践交流会に課題も見えてきました。毎回参加してくださるリピーターによるメンバーの固定もその一つです。そのことによって、フレンドリーな雰囲気ができるのですが、一方で馴れ合いや、異なった視点が出にくい状況が生まれ、いわゆる省察をしにくい状況が生まれました。私たち二人が、これらの課題を打破するためには、視野を一層広げる必要がありました。そして、私たちの理念の延長上で視野を広げる研究会として本会、つまり「日本実践美術教育学会」があったのだと思います。

3　さらに視野を広げる場として実践美術教育学会への参加

3-1　第 31 回京都大会への参加

初めて二人揃って実践美術教育学会に参加させていただいたのは、2016 年の第 31 回京都大会でした（写真７）。本学会に参加して、大きく３つの視野を広げることとなりました。

写真７　実践美術教育学会発表の様子

そこで、広がった視点を整理すると以下の三つになるかと思います。

①幼児教育の視点
②台湾の美術教育の視点
③大学や多彩な活動からの視点

3-2　幼児教育の視点

まず、これまでの実践交流会で全く触れることがなかったのが幼児教育の発表や、保育士、幼児教育研究のご専門の先生方とのお話でした。純粋な遊びの中で経験する、素材や遊びの「思いついた」は衝撃でした。幼児教育の視点からは、幼児教育（造形教育）では、指導者が環境を作ることで、学びを支えていました。それに対して、私たちは、題材設定により学びを考えていること。この環境と題材、それぞれの設定によって授業を組み立てていかなければならないことを学びました。そして、豊かな表現は豊かな活動から生まれることを学びました。さらに幼児期の豊かな活動（耕し）が保障されなければ、多様な表現（良い実り）は生まれないということに気づきました。美術教育は学校で学ぶものであると同時に、人生で経験するすべての活動と、その時の気持ちの積み重なりで表現が生まれること。この単純で、簡潔な表現の在り方を学べたのがこの学会でした。

幼児教育で特に大きかったのが、金城短期大学の森田ゆかり先生との出会いでした。森田先生から上記の幼児教育の営みを感じ取ることができたことは、美術教育を実践する者として、とても大きな心の宝物になりました。

2018 年には、森田先生の研究室にもお邪魔し（写真８）、幼児教育の実際に触れさせていただきました（写真 9,10）。

写真８　金城短期大学への訪問

写真 9　金城短期大学の教室にて

写真 10　金城短期大学の教室にて

3-3　台湾の美術教育の視点

大橋功会長が台湾との交流を大切にされておられ、その恩恵もとても大きいものでした。まず、大勢で日本の美術教育から学ぼうと来日される姿勢そのものに感化されました。また、美術教育の追求の在り方の多様性も実感しました。もちろん、日本とは異なった視点で美術の授業を組み立ててておられますので、直接の参考にはなりませんが、これだけでも美術教育への考え方の幅が広がります。

また、日本の教科領域や細分化とは異なり、子どもたちの身の周りや生活の課題からの題材設定が多いように思えまました。特に「美感」という言葉に興味を持ちました。日本の学習指導要領の共通事項として「形や色」を考えるよりも、「美感」という言葉が私たち二人の琴線に触れているように感じました。

3-4　大学や多彩な活動からの視点

本学会には、保育士や福祉施設の職員の皆さん、小学校、中学校、高等学校、支援学校の教員、教育に関わる企業の皆さん、大学の研究者も多く参加しておられます。それぞれの多様な立場からのお話を聞くだけでも、もちろん視点は広がります。特に大橋会長、鈴木副会長はじめ、本学会に関わっておられる大学の先生方の多くは、私たち同様に、小、中学校の教員だった方です。先生方との出会いで、実践研究と学術研究の両方の視点を意識できるようになりました。同時に、私たちが感覚的に行っていることへ意味付けや価値づけがなされ、論理的に説明されることのへの誇らしい感覚はこの学会ならではのものなのかもしれません。

そして副産物として、食文化に対する思考の拡散と深化がなされました。大橋会長による学会の開催地での、地域に根ざした食の文化的知識とその体験は、生きること生活することそのものの教えだと実感しています。これからも世界中のラーメンを食べにいきたいと思います。

4　おわりに

以上のように、私たち二人が美術教育の研究を追求するにあたり、実践美術教育学会で多くの学びや経験の視野を広げてきました。その結果、自分で述べるのはおこがましいですが、少し成長できたと思います。その結果として受賞させていただいたのであれば、今回の受賞は、実践美術教育学会自体が受けた賞でもあると思います。

これからも学びを広げ続けます。本当にありがとうございました。